



本ばこ

ほん

— 新刊教材・図書紹介 —

しん かん きょうざい と しょしょうかい

学習のステップを丁寧に示した参考書兼ワークブック

『論文作成のための文章力向上プログラム』

編著者：村岡貴子・因金子・仁科喜久子

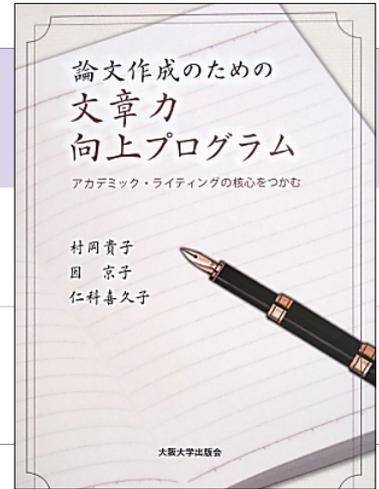
出版社：大阪大学出版会

URL: <http://www.osaka-up.or.jp/index.html>

発行年月：2013年4月

ISBN: 978-4-87259-416-4 C3080 判型・頁数：B5判・並製・176頁(別冊解答40頁)

定価：本体2800円+税



▽「本物の力」をじっくり養う

本書は論文でよく使う表現の練習や、参考になる例文が集められた「外国人学習者のための参考書」ではありません。この本に示されているのは、研究活動に関わるさまざまな文章と、それを使った豊富なタスクです。ステップを追って示されたタスクを通して、論文・要旨・メール・申請書など研究活動に関わる文章について、時間をかけて観察したり話し合ったりします。つまり「論文執筆力を身につけるためには、正解をできるだけ早く覚えるのではなく、自分自身で考えることが近道だ」というのが本書の立場です。論文執筆の力をつけた人が活用することはもちろん、論文指導を担当する教師が、本書のタスクの挙げ方を授業活動へのヒントにすることもできます。

▽研究活動に関わる多様なテーマとタスク

本書では、全10章のうちの最初の3章で次のことを扱っています。自分自身はどのように書くことを学んできたかを振り返ったり、文章を作成するというのがどのような目的を持ち、何が重要となるのかを確認したりすることです。

続く4つの章では、文章の分析や比較をした上で、問題点を指摘し、今度は自分で修正案を作成し、それを別の修正案と比較する、更には他の人と議論する、といった活動を行います。解答例は、解説とともに詳しく挙がっています。

残る3つの章では、研究要旨・活動報告・研究目的の依頼文・就職活動などでの自己紹介文が扱われています。また、投稿前の論文チェックの重要性や、査読とは何かといった、論文執筆に関わる大事な情報はコラムとして挙げられています。

文章力を鍛えるには、長い道のりを自分の足で走っていかねばなりません。伴走者を必要とする人にとって、本書は頼れる味方になるはずです。

目次	
第1章	「書く主体」である自分とは
第2章	学習・研究のための「書く」活動について知る
第3章	学習を自己管理し、学習方法を探索する
第4章	文章を読んで問題点を探す
第5章	文章の目的から構成を考える
第6章	論理の一貫性を考える
第7章	的確な表現を追求する
第8章	研究の要旨を書く
第9章	活動報告を書く
第10章	未知の人やコミュニティに「自分」を説明する
Column	
①	教科書と論文ではスタイルが違う!
②	文を寝かせる? 熟成法
③	作文支援ツール「なつめ」を利用した的確な語を選択する
④	「敬意」の表現を回避する方法
⑤	投稿前に論文をチェックする
⑥	論文の「査読」って何?

4.1 事実の分析・意義づけの欠けた文章

■タスク③ 分析

(1) 教材文④の文章は、「災害看護学の教育」のワークショップ(講義)を行った後に書かれた報告書の一部です。「災害看護学」とは大規模の自然災害や事故によって多数の死者が出ている事象に対応する看護学の一分野で、この講義は、「災害看護学教育」の意義性についての理解がまだ進んでいない地域の教員を対象に行われました。教材文④は研修の成果を説明する部分です。原文である①と、それを修正した教材文④を読み比べてください。二つの文章を比べると、修正によって教材文④の中のゴシック体で書かれた部分が付け加えられたことがわかります。この修正にどのような効果があるのでしょうか。表4-1の下の(a)から(c)に述べられた効果があるかどうか、どの効果があるかを考えて、表4-1に当てはまる効果の記号を書き入れてください。

教材文④: 活動報告

災害看護教育ワークショップ実施経緯報告書(成果の説明の部分)

今回行ったワークショップを通じて、参加した教員が災害看護学教育の意義や必要性を認識し、そのための必要となるワークショップ、知識、技術を習得し、さらに、参加者同士との交流を通じて、参加者の所属する8大学間に災害看護学導入のための人的ネットワークが形成され、災害看護学看護教育の必須科目として確立していく基盤が作られた。今後、参加者が中心となった協働作業によりカリキュラムや教材が開発されると期待される。

表4-1 付け加えられた記号の効果

追加された記号	効果(複数選択可)
ワークショップの成果は次の2点である。	
第1に、	
この教育の導入・実施に	
災害看護学を教育する技能を磨いた。	
第2に、	
災害看護学看護教育の具体的な目的として確立していく基盤が作られた。	
参加者が中心となった	

<効果>

(a) 当該部分の全体構造における位置づけやその後の論理が明確になる。
 (b) 事実関係がより明確になる。
 (c) 事実の示す意義が明確になる。

このコーナーの担当: 長坂 水晶 / 日本語国際センター専任講師